

三月三十日題慈恩寺

白居易

慈恩春色今朝盡

慈恩の春色 今朝尽く

盡日徘徊倚寺門

盡日 徘徊して寺門に倚る

惆悵春帰留不得

惆悵たり 春帰りに留め得ざるを

紫藤花下漸黄昏

紫藤の花下 漸く黄昏





雁塔聖教序碑

の の は、 でおしまいだ。  
 がな、 ちりかねてそぞろき、 のにりってつ。  
 しいかな、 はってめることも ず、  
 の の の は、 にも の にんでゆく。

旧暦では春の終わり

唐太宗時代に建てられた長安の名刹。

日がな一日。

なげき悲しむこと。

の から けられ、 が、 の の ため  
 となつた は と ばれる からなる を に  
 します。この は には の の とも ばれ、  
 が が にわたる の でちつた の と  
 な を するためでした。 の に の の  
 ります。 の は にじる をみ、 と におお  
 われていたといひます。 はその され、 の の  
 は に されたもので の も にさくりましたが、  
 を する の つとして、 くの でわいを せて  
 います。もつとも の の という はく、 と  
 しはライトアップされて なテーマパークの をしてい  
 ます。  
 の 、 は の わり の の とれつ  
 て に びました。 はにくの が にまつわる  
 を いていて、これは にかれた ともいうに  
 されていきました。 はひとりの をてり、 の  
 の にすというをつけて して したと われま  
 す。 には などのあつたことでしょう。そのなかで の の  
 なる などあつたことでしょう。そのなかで の の んだ  
 がこの にすです。 は  
 ともいわれ、 ではこれを にが っています。 はこ  
 の の を の にくのとえて に  
 いています。  
 ちなみに たり りて めざるを の の く の  
 は に され、 の わが の の こ  
 きたそがれにたづねやはぬ のなごりを の はこの をとつたと  
 われます。

東風江水に吹き 花開いて顔色を照らす 相思えども 人未だ帰らず 日暮隄上に立つ



《大意》春風が川面に吹き、花は目も鮮やかに咲いた。だが、想いこがれる人はまだ帰って来ない。独りさみしく堤上にたたずむ。(汪中詩・大堤曲)

限り無き春



《大意》春を迎える喜び (盧仝詩句)

欄前に花地を覆い 竹外に鳥人を窺う



《大意》中庭には花が散りしき、竹林から鳥がのぞく (祖詠詩)

読み  
故郷 安いやすくんぞ忘るべけんや (人はどうして故郷を忘れることができようか。・曹操「卻東西門行」)

故郷安  
可忘

佐藤象雲書



- ・一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載しているように二文字または三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

可忘 故郷安

可忘 故郷安

次号課題

隸書

是夢 此生都

可忘 故郷安

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

此の生は都て是れ夢

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	順 位	氏 名
<p>山路(やまじ)きて</p>		
<p>何やらゆかすみれ草</p>		

和泉溪石先生書

海 鹹 河 淡 鱗 潛 羽 翔

海 鹹 河 淡 鱗 潛 羽 翔

海 鹹 河 淡 鱗 潛 羽 翔

佐藤象雲書

音

カイカンカタン  
リンセンウシヨウ

略解

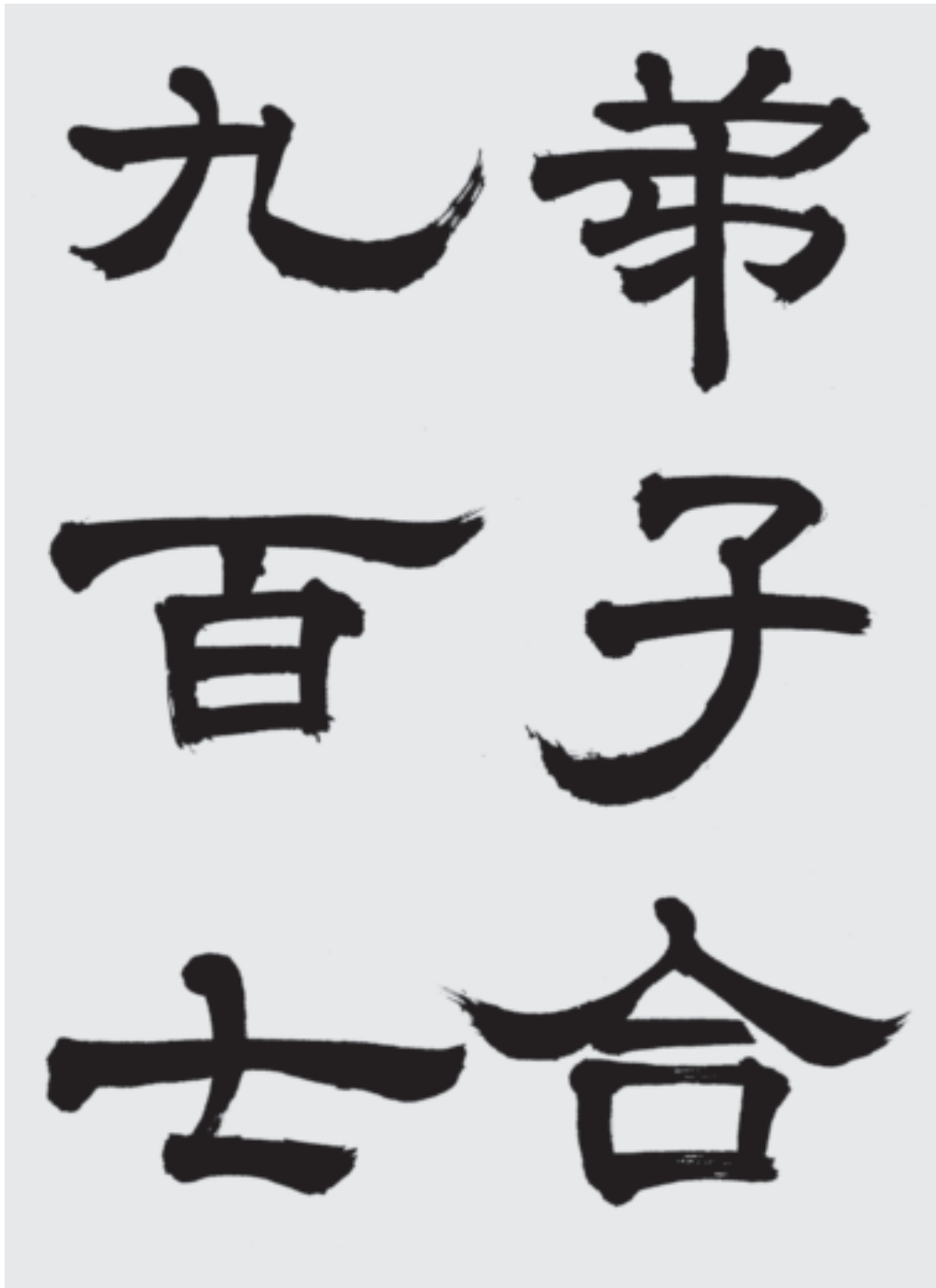
海水は塩からく河水は淡白である  
鱗をもつ魚は水中にすみ羽をもつ鳥類は空を飛ぶ

弟子合九百七

弟子合わせて九百七(人)……

■ 史晨後碑ししんこうひ (後漢・西暦一六九年) の臨書 (10)

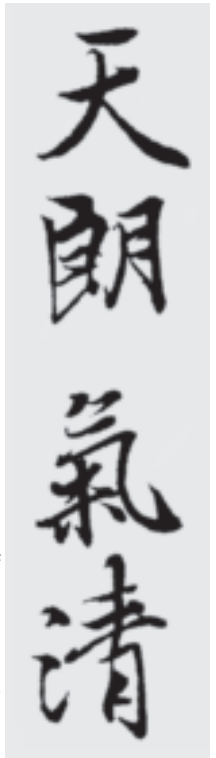
象雲臨



『弟子合九百七』

今回は八分隸(漢隸)の一番特徴的な波勢について考えてみます。この横画の最後のハネは波筆、波磔とか波勢、あるいは単に波と言ったりしますが、隸書特有の波動性とリズムをもつ線です。一般的に「一字一波」といって、原則的には一字のなかの重要な画にしか波はつきません。しかし、必ずしもつけなければならぬ訳ではなく、今月の「弟」のように波勢のない字もあります。逆に今月の「七」のように、例外的に波勢が二つにあるように見える字もあります。これは隸書の横画には波動性が常に働いていて、一般的には一画にだけ強調していると言えます。このため、波勢を抑えた横画でも楷書のように収筆をぎゅっと止めるということはありません。波筆の線質も各字によって異なります。





天朗らかに気清ほがす

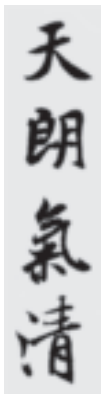
■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（12）

象雲臨

『天朗氣清』

「蘭亭は聚訟しゅうそうの如し（皆がガヤガヤ言って何がなんだか分からない）」と南宋の朱子が述べています。八百蘭亭とも言われ、複製が複製を生んでどれが王羲之本来の真を得ているか確かな結論が出ていません。有名なものを大別すると欧陽詢の臨本を元とした「定武系」と褚遂良が摹したものを元とした「褚摹系」があります。このほかに本誌で主に取り上げている神龍半印本と呼ばれ馮承素が臨模したものなどの別系統のものがあります。これも褚遂良系に含まれる場合が多く、また「真蹟系」と分類される場合もあり、まさに「聚訟の如し」です。それぞれ風趣が異なりますので、代表的な三本を参考まで左に掲げます。

第二柱（褚遂良系）



張金界奴本（虞世南系）



定武本（欧陽詢系）

